



夏井廃寺跡出土品 一括(五十九点)

指定 平成十九年四月六日

所在地 いわき市常磐藤原町斑堂

所有者 いわき市

七世紀末～十世紀前半

夏井廃寺跡は、夏井川河口に近い右岸の沖積地上に位置している。調査により東西九六・三m、南北一一九・五mの不整形に区画された溝跡の内側から、金堂跡・講堂跡・塔跡・中門などの建物跡などが発見された。金堂の北側に講堂、金堂の東側に塔が配置され、金堂は南北棟であることから、伽藍配置は観世音寺式に分類されており、古代陸奥国磐城郡の貴重な初期寺院跡として、南側丘陵上に近接し、政庁院跡・正倉院跡・居室跡などが発見され、磐城郡の郡家と考えられている根岸遺跡とともに「根岸官衙遺跡群」として、国史跡に指定されている。

夏井廃寺跡出土品のうち、堂塔の屋根に使用された屋瓦類は、瓦溜及び各遺構などから多量に出土しており、複弁蓮華文軒丸瓦やロク口挽き重弧文軒平瓦の組合せがあり、七世紀末ないし八世紀初頭の創建時代を示す資料である。軒丸瓦は、複弁六葉が四類、複弁八葉が二類三種、複弁四葉が六類七種に、軒平瓦は、重弧文が六類、均等唐草文が二類に大別できる。

平瓦には、「丈部尼刀自女」・「丸子部」・「十四年七月 義鏡」などの人名、「行方(行方郡)」・「石(磐城郡之)」・「片(片依那)」などの地名をへら書きしたものもある。

土師器や須恵器は、七世紀末～十世紀前半の寺院の存続年代を示しており、他に、浄瓶・香炉・火舎など、仏教儀式に関係するものや瓦塔なども認められる。

これらの出土遺物は、夏井廃寺跡の存続年代や性格を示す貴重な資料である。



根岸官衙遺跡出土品

一括(五百六十八点)

指定 平成二十一年四月三日

所在地 いわき市常磐藤原町手道・斑堂

所有者 いわき市

七世紀後半～九世紀

いわき市平下大越及び藤間地内に所在する根岸遺跡は、夏井川右岸の丘陵上に位置し、北方にある夏井廃寺と併せ、根岸官衙遺跡群として国史跡に指定されている。

根岸遺跡は発掘調査の結果、政庁・正倉院等が検出され磐城郡家跡であることが明らかとなり、七世紀後半から九世紀に至るいわきの中心と想定されている。

出土品のうち、木簡には「泊田郷」「鮑田」の地名や「楯縫」等の人名の記された文書木簡、「玉造郷」「飯野郷」「判祀郷」等の地名や「丈部」「生部足人」「君万呂」「宮麻呂」等の人名を記した付札木簡及び文字を削り取られたと見られる付札形等の木簡状板材等がある。木製品には鋏柄・斧柄・豎杵・横槌・紡織具等の生産用具、皿・曲物・まな板・下駄等の生活用具、刀形等の祭祀用具がある。また須恵器・土師器等の土器は、郡家成立前の集落に伴うものから磐城郡家に伴うものまで七世紀前半から九世紀に至るものが出土した。瓦は磐城郡家に伴う七世紀末から九世紀に至る夏井廃寺出土の瓦と同様のもののである。

夏井廃寺出土品は平成十九年四月に一括五十九点が県指定となったが、根岸官衙遺跡出土品として木簡十二点、木簡状板材十三点、木製品七十九点、円面硯六点、須恵器八十九点、土師器等二百四十九点、赤焼き土器三点、土製鞆羽口三点、土製勾玉一点、石製品二点、鉄製品四点、軒丸瓦六点、軒平瓦五点、丸瓦二十三点、平瓦七十三点の計五百六十八点を一括して県指定とされた。これらの出土品は、郡家成立前の集落から郡家の終焉に至る背景を示す資料として極めて重要である。



しょうへいたらしよまへずひかま
正保平城絵図控

一鋪

指定 平成二十六年九月三十日

所在地 いわき市小島町一丁目

所有者 個人

江戸時代正保年間(一六四四～一六四七)

縦 三二・六cm、横 一三・二cm

江戸幕府は全国を完全に支配した後、諸大名に命じて国別に地図を作製させ提出させた。慶長十年(一六〇五)にも国絵図を作成したと伝えるが、詳細は不明である。現在伝わる国絵図は正保元年(一六四四)、元禄九年(一六九六)、天保六年(一八三五)の三度のものである。更に、国絵図には附録として各郡村の石高を列記した国ごとの郷帳もつくらせた。また、正保期には国絵図のほか、諸国の城郭とその周辺をも描いた城絵図も作製させている。

この平城郭絵図には作成年号が記載されていないが、新川の記載がないこと、鎌田町、新川町の両町がまだ開かれていないことなどから幕府が正保元年に国絵図と共に命じた城絵図と推定される。『内藤家文書』の「慶安二年御用印判並御意書付之写」によると、「長橋表より桜馬場南之方へ新川(旧新川)を掘ることとして慶安五年(一六五二)九月に、いわゆる新川(旧新川)を掘ることを命じている。桜馬場とは本図を見ると現在の鎌田町である。これによっても作成年代が明らかにされ、城下町がまだ完成されていないことが指摘できる。

本来この絵図は、内藤家・井上家・安藤家と歴代の磐城平藩主に伝承されてきたものと思われるが、明治期に安藤家の家臣である加藤家に渡ったものと思われる。描法は城内を正確に記し、遠方は簡略化されている。狩野派の絵師によるものと思われ、厚手の紙に彩色されている。



絵馬 双鷹図 一面

指定 昭和五十五年三月二十八日

所在地 いわき市平字八幡小路

所有者 飯野八幡宮

江戸時代・延宝七年（一六七九）
高さ 九二cm、横幅 一三五cm

この絵馬は長方形で、黒漆の額縁を巡らしている。黒漆を塗った地板に、唐獅子の背に乗せた止まり木に、鷹を据えた構図のリリーフを取り付けたものである。右の鷹は純白に、左は普通体に彩色され、彫刻の技法は緻密で、気品のある作品である。彩色も比較的良く残されており、漆工芸の作品としても優れている。残念なことに彫工の名は不詳であるが、鷹をモチーフとした絵馬では県内最古の作品である。

銘文は金泥にて、次のとおり記されている。

奉掛 藤原概純敬白

御宝前

延宝七年己未正月吉旦

奉納者の藤原概純とは、磐城平藩内藤家老の松賀^{やちの}族之助である。後に泰閏と改め、排号を紫塵^{むら}と号した。彼の実の祖父は荒木村重の一族で、二万石の大名であった荒木重堅であった。重堅は、関ヶ原の合戦で石田方に属したため、父は浪人となり母方の姓に改め大野市左衛門と称した。のちに内藤忠興に三百石で召し抱えられ、その子供の族之助は、幼くして内藤義概に仕え、二千石の俸禄をうける。元禄十五年（一七〇二）三月二十二日、江戸にて没し、墓は鎌倉の光明寺にある。



絵馬引馬図 一面

指定 昭和五十五年三月二十八日

所在地 いわき市平字八幡小路

所有者 飯野八幡宮

江戸時代寛永二十年(二六四三)

高さ 八三cm、横幅 一一四cm

唐破風型の金銅製の縁金具をつけた板額に、板面の下地は金箔が押されている。彩色仕上げをしたもので、二人の舎人が一頭の神馬を引く図が描かれている。黒駒は躍動し、轡をとる舎人、手綱をとる舎人の顔と衣文や姿態の描写に生彩があり、鞍の文様や彩色が華麗である。惜しまれるのは、下地の金箔の大部分が剥落していることである。

絵師は不明であるが、作風からみて狩野派の画人の作と思われる。

この絵馬の縁金具に「下り藤」の紋所が施されているところから、磐城平藩主の内藤氏が奉納したものであることがわかる。

この絵馬が奉納された寛永二十年(二六四三)頃は、幕府の施策もほぼ整って政治も安定し、一般に神社・仏閣の創建、再建の機運が高まっていたときである。

絵馬は元來生き馬の奉納からはじまり、木造の馬や漆塗り木馬を経て、描き馬を奉納するようになった。

この絵馬は、神の依代としての神馬を描いたもので、絵馬の本流を示すものである。



飯野八幡宮の流鏑馬と献饌

指定 昭和五十八年三月二十五日

所在地 いわき市平字八幡小路

保護団体 飯野八幡宮

飯野八幡宮の流鏑馬神事は、現在は九月一日の祭始祭から始まり、円座祭、潮垢離神事と続く。建暦元年（一一二二）から続く潮垢離神事は、藤間の浦で宮司・騎士・馬の潔斎が行われ、浜辺で採取した貝殻を盃として直会がある。その後、久保木・青木・星野の三家に立ち寄り、庭先で馬を空駆けさせる。流鏑馬神事は現在、十五日の直前の土・日曜日の午後に行われる。騎士は狩りの装束に笠・膝・籠を着け、弓を持つ。笠は五色の紙垂で飾られ、馬の背には蒔絵の和鞍が置かれる。また、馬の四脚は藤間の海岸から角樽で汲み上げてきた潮水で清められ、神前で御祓いをうけたあと、神域を一巡して一の鳥居の前で礼射式を行い、馬場に向かう。馬場では空駆け、生姜撒き、扇子撒き、的矢の順で行われる。的は杉板七枚組みで方二尺五寸の大きさで、馬場の三ヶ所に立てる。十五日には献幣使を迎えて例祭が行われ、直前の日曜日の古式大祭には神輿渡御と八十八膳献饌が行われる。神輿は稲荷台にある御旅所（子楯倉神社境内）まで渡御した祭典の後、神社に還御する。その後直ちに、八十八膳の献饌が始まる。一夜酒・繭形の餅・青さや豆・里芋の御汁・山芋・かじめ・大根・みょうが・河骨・にがいも・ごぼう・ずいき・わらびの御料理・栗・柿・くるみ・柚子の御菓子・高盛のおふかしが旧儀に従って、漆塗りの椀、高杯などの祭器に盛りつけられる。それらを唐櫃に収めて白丁が奉奠する。本殿に献饌された後、境内の摂社、末社を巡って、流鏑馬が行われる。明治以前は八月十四・十五日に祭礼を行い、流鏑馬の騎士も、領主と宮司それぞれが奉納していた。明治時代に古式神事行事が政府の命により中止されたが、当時の宮司、飯野盛容の努力により八十八献饌は続けられた。



上三坂のヤッチキ踊とサンヨー踊^{かみきさか}
おどり

指定 平成八年三月二十二日

所在地 いわき市三和町上三坂地区

保存団体 いわきやっちき踊り保存会

上三坂のヤッチキ踊は、本来燿歌(歌垣)の踊りであった。戦前は鎮守の祭りや盆踊りなどでも踊られていたらしいが、むしろ中心的な踊りの機会は、関伽井(赤井)嶽薬師の夏祭りであった。「万葉集」や「常陸風土記」に見られる筑波山の燿歌は、現在その片鱗も見られないのに対し、上三坂に伝えられているのは、極めて貴重である。

この踊りは右手右足、左手左足を交互に同時に振り動かし、ダイナミックに飛び跳ねる。現在この踊りは大きな輪踊りの形で踊るが、もとは小さな輪踊りか、男女二人が向かいあつて踊っていたようである。

なお、このヤッチキ踊の名称は、「ヤッチキ ドッコイ ドッコイナ」という、囃子詞から生まれたものと思われるが、地元では他に「ハネッコ」、「バツサバ」、「浅川踊」などとも呼んでいる。

また、サンヨー踊は、盆や祭りなどの時に夜を徹して踊られた踊りである。ヤッチキ踊はテンポが速くダイナミックな踊りであるため、長い時間踊ることが出来ず、ゆつたりとしたサンヨー踊を踊っては、その合間にヤッチキ踊を踊つたらしい。

この踊りや歌は、いわき市の海岸沿いの地域にはなく、むしろ上三坂と交流のあつた田村地方・石川地方に共通のものがあつた。しかし、市町村合併によつて三和町がいわき市に入るに伴つて、当時の人々の判断等により、盆踊りは「いわき甚句」に統一され踊られなくなったため、サンヨー踊を伝える人が少数になつた。ヤッチキ踊とは対照的な踊りであるが、このサンヨー踊も上三坂の人々が愛好していた踊りである。



渡戸たどの獅子舞ししまい

指定 平成十三年三月三十日

所在地 いわき市三和町渡戸字宿

保存団体 渡戸区

磐城の獅子舞は、一人立ちの獅子である。一人ずつ獅子頭を被り、笛の音色に合わせて、腰に付けた鞆鼓つづみという小太鼓を打ちながら、三頭ひと組で舞う。

三和町渡戸に伝わる獅子舞は、宿しよ、高野、楢木・峠平の三地区の持ち回りで、鎮守御塚神社に毎年奉納されている。祭礼日は、以前は旧暦の八月一日であったが、現在は九月の第二か第三の日曜日に行われている。

三頭の獅子は、先獅子・後獅子・雌獅子と呼ばれ、祭りが近くなると、それぞれに師匠がつき、その年の宿しよを勤める家で練習を積む。師匠を勤める家柄は決まっています、練習期間中は付きっきりで厳しい指導に当たるので、短期間でしつかりした舞ができるようになる。

本祭の前日には、「中見舞」と称して師匠全員の前で練習成果を披露する。祭り当日は、宿しよ、御塚神社、お寺、区長宅の順に奉納され、宿しよと高野では、地区の全戸に舞い込み、二つの演目を演じる。

演目は地区によって若干の違いはあるが、散らし・宮見・花吸い・弓くぐり・四ツ花など、おおよそ同じである。

渡戸地区では保存会の組織はなく、就学前の子供から、獅子役の小中学生、笛や唄、そして師匠の青年・壮年・老年にいたるまで、地区全体でこの芸能を継承している。また、三地区が交互に奉納し、演者の引継ぎの際の「かぶりがえ」では、他地区の師匠の前で演じるなど、継承のシステムもしっかりしている。



磐城大魂神社のお潮採り神事
いわきおおくにたまじんじや

指 定 平成二十年四月四日

所在地 いわき市平菅波字宮前

保存団体 大魂神社氏子会

大魂神社の「お潮採り神事」は、五月四日の「本祭り」で行われる。神職は、早朝に御神体を本殿から神輿に移す。この御神体は、かつて平豊間に流れ着いたものであるという。この伝承にもとづき、御神体は浜下りをする。浜下りをしないと、漁がないとか、悪疫が流行るとか言われ、ぜひ、下ってくれと豊間からお迎えに来ることもあった。

御神体が移された神輿は、氏子である平菅波・山崎・荒田目の三大字の青年によって担がれ、一路、平豊間の浜を目指す。平上大越、藤間、薄磯などのたくさんの御旅所を経て、正午ごろに豊間に到着する。すると今度は、神輿は豊間の人々の手によって浜へと下ろされ、青竹を四面に立てて設けた祭場に、海に面して安置される。やがて氏子青年会の代表が海に入って潮水を桶に汲み取り、神職がこれを瓶子に移して神輿に供える。そして祭式、直会のあとに、いよいよ豊間の人々が神輿を担いで海に入っていく。どぶどぶと寄せる波を受けながら沖に進み、屋根を残すくらいにまで、神輿を海水に浸す。まさに神輿の「潮垢離」である。同様の神事は、福島県浜通りにはよく見られるが、ここまで深く神輿を海水に沈めるのは珍しく、この形態が「浜下り」神事の最も古い形であると考えられる。こうした一連の神事が済むと、神輿は、再び三大字の青年たちによって担がれて、大魂神社を目指す。

浜へ下りる途中の御旅所での習俗や、祭に参加する青年たちの組織など、祭に関わるさまざまな古い習俗が、よく残されている貴重な祭である。



絹谷まきやの獅子舞しし舞

指 定 平成二十二年五月二十一日

所在地 いわき市平絹谷字諏訪作

保存団体 絹谷獅子舞保存会

この獅子舞は関東地方に起こったと考えられる風流系の三匹獅子舞の系統である。九月の最終土日に開催される絹谷の鎮守・諏訪神社の秋祭りの際、宵祭りと本祭りの二日にわたって境内で演じられる。一時中断していたが、昭和四十九年（一九七四）の秋祭りから復活した。

獅子は雄獅子・中獅子・雌獅子の三匹で、保存会員の男性が獅子舞を行う。いずれも獅子頭をかぶり、袖口を三角模様染め抜いた紺の着物にたつけ袴をはき、白手甲、素足で太鼓をつける。原則として初めに雌獅子を舞い、中獅子、雄獅子と進む。ほかに踊り手として、はだいで布面をつけ大団扇と祝い棒を持つ道化役のとうろくが二〜三名いる。

種目は次の三種である

- (1)花吸いの舞 舞庭に花籠が二名立つ。雄獅子と中獅子がやや離れて横に並び、両者の後ろに雌獅子が立ち、片手を前に上げては、手と反対側の足を後ろに伸ばす。
- (2)雌獅子奪いの狂いの舞 舞庭に花籠が二名立つ。雌獅子奪いで、雄獅子、次に中獅子の順で倒れ、最後に伸直りをする。
- (3)弓の舞 弓二張を舞庭に建てる。雄獅子と中獅子が弓をはさんで舞う。

いわきの獅子舞の多くは棒術と対になっていて、本件もそれぞれ種目の前に棒と刀の棒術がつく。また、舞庭に張る大幕には「天保二年（一八三二）龍次卯七月吉辰」と書かれている。県内の獅子舞の中では南会津郡会津町の「田島の三匹獅子」とともに、最も古風な芸態で学術的な価値が高い。



下高久の獅子舞しもたかくししまい

指 定 平成二十二年五月二十一日

所在地 いわき市平下高久字八幡

保存団体 下高久区

下高久の獅子舞は、風流系の「三匹獅子舞」と呼ばれているものに属する。下高久の八幡神社の九月中旬に行われる秋祭りに、同社及び八剣神社などで奉納される。獅子舞は棒術と対になっており、獅子舞は青年会が、棒術は小学校高学年の男子が演じる。さらに、ここに小学校高学年の女子による棒使いと手踊りといった諸芸も加わる。

獅子は、雄獅子・中獅子・雌獅子の三匹で、演じる種目によってここに道化役一名が加わる。このほかに、花傘持ちと弓持ちが各二名、雌子方には六孔の篠笛十名ほどがつく。獅子頭は、木彫りに黒漆を基調とし、雄獅子と中獅子には二本の角が付いている。また、獅子はそれぞれ前に杵無し締太鼓を縛り付け、両手に撥ばちを持って舞う。獅子舞の種目は、大きく前芸と本芸とに分けられる。前芸は最初に必ず舞うもので「おかざき」と「おまく」の二種、本芸は、「三匹舞」「一匹舞」「花傘舞」「扇の舞」「花吸いの舞」「雌獅子かくし」「弓くぐり舞」「獅子踊」の八種である。獅子舞の間に演じられる棒術は、すべて二名が相対し、木刀と木刀、六尺棒と六尺棒などで、突いたり打ち合ったりする。

下高久の獅子舞は、観衆の心をひきつけて離さない豪放なもので、獅子たちの喜怒哀楽を見事に表現していると言われる。特に、雄獅子と中獅子が激しく争う「雌獅子かくし」、三名が並んで順に弓の弦を引きながらくぐる「弓くぐり」に見られる芸態は、県内の獅子舞の変遷を考えるうえで貴重なものである。



金冠塚古墳

指定 昭和三十年二月四日

所在地 いわき市錦町塚下

所有者 いわき市

金冠塚古墳は、勿来低地の南を流れる蛭田川の沖積微高地にある。江線までは約一・九mの距離にあり、呉羽化学工業株の清風寮に隣接し、J・R常磐線が古墳の東を通る。一〇数基からなる中田古墳群（七曜塚）の一つで最南端に位置する。径二・八m、高さ三mの円墳で、山の上古墳と呼ばれていた。

昭和二十五年、明治大学によって発掘調査が行われ、金銅製飾金具三点が出土したことから一躍有名となり、金冠塚の名がつけられた。

凝灰岩などを利用した横穴式石室が墳丘中央南寄りに構築されており、南に開口する石室の全長は七・五mである。

羨道幅一・三六m、長さ三・三〇m、高さ一・四〇m

前室幅一・四四m、長さ二・〇五m、高さ一・七〇m

後室幅一・五四m、長さ二・六〇m、高さ二・二〇m

天井石は六枚、後室をおおう方形の板石は特に大きく一辺が二・三m、側壁は切石小口積み、後室奥壁と側壁は大きな板石を用いている。

石室から次の様な遺物が出土した。後室上層から頭蓋骨・直刀。中層から頭蓋骨・須恵器。下層から頭蓋骨・附・骨鏃・金銅製飾金具・金環・金銅製太刀（銀線片・真金具）・管状銅製品・ガラス小玉・桂甲・鞍・轡。前室から人骨・鐺・鉄鏃・真金具・辻金具・コハク玉・革綴・冑カ・黒色蓋付碗等。羨道から桂甲小札。これらの遺物は、我が国初の埋蔵文化財に指定され国有第一号となった。東北地方における後期古墳文化研究上、重要視されると同時に、中央政権と強力に結びついた、勿来低地を支配した被葬者の存在が明らかとなった。



高久の古館たかくのこぼん

指定 昭和三十一年九月四日

所在地 いわき市平下高久字小館

管理者 いわき市

室町時代(十五〜十六世紀)

滑津川左岸の西から張り出す丘陵先端に構築された中世の城館跡である。眼下に滑津川流域一帯の、海岸平野を一望できる。地理的、地形的にすぐれた環境にある。標高は約四七m、東西に長い台地の約三、八〇〇mが遺跡の中心地となる。台地中央やや西よりに、南北に走る土塁が幅約六m、高さ約一・五mで存在する。南、北の末端は急崖となり、東西には二段の郭と思われる段差がある。北に開けた標高三〇mの平場と、さらに東の地藏院のある標高二〇mの平場も関連する遺跡と推定される。

市内には中世の城館跡と推定される場所は約二〇〇ヶ所以上確認されており、高久の古館もこの類に属し、市内では中規模の城館跡である。西北に金子溜池、台地下には「馬場」「滝」「前の内」「蛭坪」などの字名があり、中世的な時代的環境をよく残している。

この地を石城軍団跡とする説があるが、考古学的検討が進んだ現在では全く当てはまらない。時代を上げて高久小次郎が館主とする説もあるが、これも積極的な証拠に乏しい。しかし、中世における岩崎一族の防御施設として理解することはできそうである。国魂文書(県指定)の国魂岩城系図には、初代忠衛の肩書きに高久三郎と記していることから、注目に値する遺跡である。

また、確実に館主が判明するのは、天正年間(一五七三〜九二)で、志賀右衛門尉(岩城家家老)の一族富岡治部少輔である。



玉山古墳

指定 昭和五十五年三月二十八日

所在地 いわき市四倉町玉山字林崎

所有者 金光寺 ほか三名

古墳時代(五世紀前半)

面積 六、六四七㎡

玉山古墳は、JR常磐線いわき駅の北東一〇kmの玉造川(仁井田川)左岸の金光寺裏山にある。後円部を東に向けた前方後円墳で、葺石と思われる径一五〜二〇cm大の河原石が散在している。前方部南側付根と、北側先端の斜面から採取された土師器から、造営年代を五世紀前半ごろと推定する市内最大の盟主的人物の墓と考えられる。

後円部の墳麓線が確認されていないが、墳丘の主軸線の全長は一〇八〜一一八m、後円部径東西五三〜六四m、南北四七m、前方部の長さ四九〜五一m、前方部幅二九〜三二m、前方部高さ五m、後円部高さ七mである。

東北地方で一〇〇m以上の前方後円墳は、会津坂下町の亀ヶ森古墳(国指定・一二七号)、宮城県仙台市の遠見塚古墳(国指定二〇〇号)で、玉山古墳は東北地方第三、四位の大古墳である。付近には以前に小円墳が存在したというが、今では湮滅してほとんど残っていない。西方三〇〇mの大野中学校付近には御城古墳群があり、数基の円墳が残存し、埴輪を出土する場合もある。



専称寺境域

指定 昭和六十二年三月二十七日

所在地 いわき市平山崎字梅福山ほか

所有者 専称寺 ほか二名

室町時代(十六世紀)

面積 五二、八三六㎡

梅福山報恩院専称寺は、応永二年(一三九五)良就上人十声大和尚が開山した寺で、浄土宗名越派の総本山であった。

名越派は、浄土宗の宗祖法然の門弟で、鎮西派を開いた弁長の弟子良忠の門下、良弁(尊観)が興した流派である。良弁の弟子良慶を経て良山は如来寺(平山崎字矢ノ目)を開いた。なお良就は、良山の高弟にあたる。

専称寺六世良大(文龜年間一五〇一〜〇四)のとき勅願所となり、良大の衣鉢を継いだ僧らが全国に布教して建てた寺院は、江戸初期までに五〇〇ヶ所を数えたという。万治四年(一六六一)には円通寺(栃木県益子町)と共に、名越派の檀林(僧徒の学問修養の道場)として学僧が二百余人を数えた。

寛文十一年(一六七二)に、本堂につづいて方丈、庫裡も再建され伽藍が整備された。江戸初期以来幕府から寺領七〇石を賜わり、奥羽の浄土宗全寺院を支配する総録所となる。しかし、明治維新の浄土宗派の混乱により、名越派が廃止された。明治三十五年(一九〇二)六十七世良勲による諸堂の修理や、門弟教育の努力も空しく、六十八世良幽を最後に名越派が伝来・伝戒を行うことが停止された。

現在の境域は縮小されているが、山号に由来する梅福山の山容をはじめ、寂光院跡、衆寮跡、江戸期の本堂、庫裡、鐘楼なども現存し、浄土宗檀林の姿を良く止めている。衆寮跡地に植栽された白梅は、境域にひとしおの風趣を添え、境域の良好な保存とあわせて、その勝景は史跡及び名勝として高い価値を有する。



上平窪のシイノキ群かみひらくぼ

指定 昭和二十八年十月一日

所在地 いわき市上平窪字横山

所有者 いわき市

夏井川中流左岸の、河岸段丘南端に生育するシイノキ群で、樹種はスタジイである。この地域には各所にスタジイが残っていて、過去の自然植生を推定する資料となっている。

このシイノキ群は、上平窪の墓地周辺にある巨木四本で、大きなものは樹高二〇m、胸高幹回り六・五m、小さいのは樹高一五m、胸高幹回り二・五mである。周囲は果樹園で土地が肥え、立地に恵まれ樹勢は盛んである。樹下にはヤブツバキ・アオキ・シロタモが、下草にはキスタ・テイカカズラ・ヤブコウジがあつて、いわき市の常緑広葉樹林域の主要植物はすべて備わっている。

スタジイの単体は、原町市・富岡町にもあるが、いずれも海岸に近い。本樹は内陸に深く入って分布の最前線に近い、スタジイの大木であることに意義がある。

スタジイフナ科

スタジイは暖帯の代表的な極相林構成樹木で、分布の中心は関東以西の暖帯である。常緑広葉の木で、樹高は二〇〜二五mになる。樹皮は黒灰色で縦にさけて凹凸がはげしく、枝は太く出て小さい皮目をつける。樹冠は傘形に広がり、下層の葉が少なく、樹下に大きな空間ができる。雌雄同株で、崖地などの肥沃な深い土壌を好む。春には淡黄色の小さな花を付け、秋には先のがつたシイの実を付ける。シイの実は、採取して食用に供することができる。シイタケの原木として利用されたことと、建築木工用材としては価値が低いという理由から伐採され、近年極端に少なくなつた。



石森の Калинин

指定 昭和三十年十二月二十七日

所在地 いわき市平四ツ波字石森

所有者 忠教寺

この Калинин は、石森山中腹の石森観音堂の境内にある。植栽されたもので、樹高約一m、胸高幹回り三m、根回り四mの古木である。樹齢八百余年と伝えられるが正確なところは不明である。樹幹は地上二m付近まで空洞があり、梢は三幹に叢生している。樹皮は緑褐色でなめらか、鱗片状にはがれて雲文ができる。五月上旬に淡紅色で直径三cmぐらいの花を枝の端に付け、果実は扁球状で凹凸のある秋ナスのような形になる。黄色に熟しよい香りをもつが、果肉は木化し渋みが強く、適宜甘味を加えて食べることができる。

中国原産の落葉樹で、イチヨウ・ナギ・タラヨウ・ムクロジ等と同様に異国の珍奇な植物として、尊崇の対象、文化・権威の象徴だったものか、薬用であったものか、異国崇拜心情を吐露したものか、また庶民の素直な献木であるのかは判らない。

Калинин (カラナシ木瓜) (バラ科)

Калинин はボケ属に含まれる落葉高木である。樹幹は叢生して直立し、枝は細く上に向くため樹形は柱状になる。葉は互生、倒卵形で細い鋸歯があり、長さは四〜八cmである。明るい場所で土壌の深いところを好み、成長が早く、樹高六〜一〇mになる亜高木である。剪定に耐え庭木として使われ、果実は輪切りにしてかげ干しにし、煎じて鎮咳剤として使用される。古くは肺結核の一期・二期にも使用したといわれる。近年果実酒として芳香がよるこばれ、栽培されるようになった。



小浜のコシダ・ウラジロ自生地おびま
じげんち

指定 昭和三十一年九月四日

所在地 いわき市小浜町渚

所有者 個人

小浜は海岸段丘の裾にあり、周囲は段丘崖に囲まれて夏涼しく冬暖かな環境である。海風と適度な湿気があり、また地下水が湿気を保つので、暖地性植物の生育に適した地域である。

所有者宅裏山の杉林内に生育するコシダ・ウラジロは、約十グループほどあり、管理が行き届いて群落の勢いは良好である。このコシダ・ウラジロ群落は、日本の北限地帯のものである。ウラジロはコシダより耐寒性が強いので、さらに北上して久之浜町末続付近まで伸びている。しかし、七月から八月にかけて放散された胞子は、発芽して前葉体となり、造精器を形成しても低温で造卵器の形成がおくれ、有性生殖ができない。従って、ここでの繁殖は、専ら根茎の拡張による栄養生殖であり、地上部を採取すると、光合成ができずに絶滅するおそれがある。

古くからこの付近は、コシダ・ウラジロの自生地として知られていて、生花や正月の飾りに使われ絶滅したところもある。昭和九年当時、平第三小学校訓導野崎順氏の調査報告で玉露・龍ヶ崎の自生地とともに注目されはじめた。

コシダ(ウラジロ科)

常緑性のシダで、根茎は良く伸びる。草丈は二又に分かれて二mになる。葉の表面は革質で光沢があり、長さは一五〜三〇cm、幅三〜七cmで、葉裏が白い。

ウラジロ(ウラジロ科)

常緑性シダで根茎が長く地中をはい、良く育った葉は四〜五対の羽片を出し、草丈は二mほどになる。葉の長さは五〇cm以上、幅は三〇cmになるが光沢はない。葉の裏は白く、星状毛がある。葉は羽状に深くさける。



上三坂のシダレグリス自生地

指定 昭和三十一年九月四日

所在地 いわき市三和町上三坂字作田

所有者 個人

上三坂字作田は、西に一八九mの芝山と、東に七二一mの塩見山にはさまれた標高六〇〇m前後の阿武隈高地中にある。シダレグリは、人家に近いヤマツツジに包まれた小高い丘に散在する。峰部にあるのが古木で樹高三m、胸高幹回りは七〇cmである。地上二mぐらいのところから枝が反転し、地面に垂れて接している。この古木を中心に数本のシダレグリがある。

シダレグリの果実は小形で、種子は食用にならないほど小さい。種子を播いても、大部分は正常なクリになり、シダレグリになるのは極稀である。従ってこのクリの枝が垂れる形質は、遺伝的に固定されたものではない。

自生シダレグリの種樹は、他の樹木の間では生長が悪く、人手を使って周囲の樹木を切り開くとよく育ち結実する。自生地一帯の丘は所有者の管理が行き届き、下草には四季おりおりの野の花が咲く。

クリ(ナ科)

温帯の落葉高木で、成木は高さ二〇m、幹回り二〜五mになる。樹皮は初めなめらかだが、成木には裂け目ができる。頂芽がなく冬芽は球状で、赤い芽鱗で包まれる。葉は互生、長楕円形で鋸歯があり、先端は鋭くとがる。側脈は一五〜二〇対。雄花房は新しい枝について淡黄色、長さ一〇〜一五cm、甘い独特な匂いを放つ。雌花は二、三個ずつ集まって雌花の下につく。六月に開花し、十月にいがに包まれた堅果をつくる。材は耐朽性に富み建築材に用いられる。



波立海岸の樹叢

指定 昭和三十一年九月四日

所在地 いわき市久之浜町田之綱字横内

所有者 波立寺

久之浜波立海岸の波立薬師堂の境内、裏山及び国道六号のトンネルを越えた岬一带に、海岸性の暖地性植物の自然林がある。この林はヤブツバキとトベラが優占する群落で、林内は照葉樹林特有の、陰うつな雰囲気包まれている。生育しているおもな樹木は、クロマツ・スダジイ・タブノキ・モチノキ・イブキ・ヤブツバキ・マサキ・ヤツデ・トベラ・ヒサカキ・マルバグミ・アオキ等で、下草はツワブキ・オニヤブソテツ・ジャノヒゲ・ハマギク等である。このなかで、スダジイ・ヤツデ・マルバグミ・ツワブキは太平洋岸の北限地帯のもので、ハマギクは南限に近いものである。

暖地性植物群は、波立海岸から北上するにつれて次第に少なくなり、自然の樹叢の状態に残っているものはなくなる。ここに植物地理学上の意義がある。

また、海崖を覆うヤブツバキやトベラは、潮風を強く受けて美しい流線型の偏状木になっている。

暖地植物群

日本の暖地と亜熱帯には、ヤブツバキ・シイ・カシ・タブ等を種とした常緑広葉樹の極相林ができ、温帯にはブナを中心とする落葉広葉樹の極相林ができる。いわき市は、阿武隈山地山麓より海岸側は温暖な気候なので、常緑広葉樹の極相林ができる地帯である。ここは人類にとっても生活しやすい所のため、林地の開発が進み、常緑広葉樹林は、社寺林や崖地林として残るだけになっている。

日本の常緑広葉樹の葉は光沢があるので、照葉樹ともいわれている。森林やコナラ林の中にヤブツバキやヤブコウジがまじっていたら、その地は昔、照葉樹林であったことを物語る。